

消えゆく波か流血か： 北アイルランドの女性作家アリス・ミリガンの 詩における死の表象と抒情性について

伊東裕起

はじめに

W・B・イエイツ (William Butler Yeats) の伝記に表れる人物のひとりに、アリス・ミリガン (Alice Milligan) という女性がいる。イエイツよりひとつ年下の彼女は、(現在の) 北アイルランドに生まれたプロテスタントの作家である。プロテスタントとはいっても、南で地主階級となったアイルランド聖公会 (Church of Ireland) でもなければ、北でユニオニズムの主流を形成したアルスター・スコッツ (Ulster Scots) とも呼ばれる長老派教会 (Presbyterian) でもなく、当時北アイルランド人口の約3%と少数派であった¹ 第三のプロテスタント教派、メソジスト (Methodist) の作家である。メソジストは聖公会から分派した福音主義的な教派であると同時に、当初から女性に高等教育を施すことに熱心だった教派でもある。彼女は「女性のための平等な教育のパイオニアであった²」メソジスト・カレッジ・ベルファスト (Methodist College, Belfast) で学び、続いてロンドンに出てロンドン大学キングス・カレッジ (Kings College, London) で学んだエリートでもある。アイルランド王立アカデミーの会員を父に持ち、アイルランドの歴史や文化に強い興味を持っていた彼女は、イエイツの薦めで劇を書き始めた³。そして彼女はアベイ座でも作品を上演し、アイルランド文芸復興の主要な作家のひとりとなった。しかし、アイルランド文芸復興のキャンオンが男性中心、そして、ダブリン中心の視点で捉えられていたため、北部で活躍したプロテスタント女性のナショナリスト・共和主義者だった彼女は長年等閑視されてきた。

しかし、近年では彼女にスポットライトが当たることも増えてきている。2010年から2011年にかけてアイルランド国立図書館でアリス・ミリガン展が開かれ、2012年にはキャスリーン・モリス (Catherine Morris) による *Alice Milligan and the Irish Cultural Revival* の出版がなされた。2014年に出版された *Vivid Faces: The Revolutionary Generation in Ireland, 1890-1923* において、ロイ・フォスター (Roy Foster) はミリガンを復活祭蜂起に至る道を準備したナショナリストの作家のひと

り、「若い文学肌のナショナリストたちに対する主要な影響力⁴」として詳しく論じた。また復活祭蜂起100年および彼女の生誕150年にあたる2016年には、マルティナ・デヴィリン (Martina Devlin) によって彼女をモデルにした小説が書かれ、*The Glass Shore: Short Stories by Woman Writers from the North of Ireland* の一篇として出版された。同年にはアイルランド語の劇団 Aisling Ghéar によって、彼女を題材とした演劇 *Alice Milligan – A Girl of Genius* が上演された。

モリスはミリガンを、アイルランド研究に欠けていた視座である「北・プロテスタント・女性」の視点を補完する作家であるとして高く評価している⁵。そのようなミリガンを、デクラン・カイバード (Declan Kiberd) は「近代アイルランドを作り出した偉大な人物の一人⁶」と形容した。

しかし一方で、彼女には厳しい評価も存在する。ロイ・フォスターはミリガンを高く評価しながらも、彼女は「扇動プロパガンダ」の作家で「二次創作的で平凡」であるとも形容している⁷。のちに述べるが、このようなミリガン観は、ある意味彼女の生前からの評価でもあり、イエイツもそのように彼女を評価したこともある。また、イアン・ダルトン (Ian d'Alton) は、ミリガンは北のプロテスタント女性でナショナリスト・共和主義者という彼女の「アイルランドにおけるマイノリティの中のマイノリティの中のマイノリティ (a minority of a minority of a minority in the island)⁸」という属性ゆえにピックアップされているだけだとした。

これは実は難しい問題をはらんでいる。もし彼女がナショナリストではなく、政治活動を行わず、プロパガンダ的な作品を書かなかったならば、彼女の作品も名前も世に残らなかったかもしれない⁹。また、その作品の文学性だけでなく、「北・プロテスタント・女性」としてアイルランド独立運動に参加したという、その属性の持つ政治性が、彼女の作品を再読する今日的な意義となっていることは否定できないのだ。しかし、プロパガンダ的な作品であったとしても、その中に個人的な思想や感情が混じることは避けがたい。加えて、ナショナリストのコミュニティにおいて作品を発表するということは、そのような政治性によるある種の検閲を受けることをも意味する。プロパガンダ的な作品であっても、そのテキストを読み解く際には慎重であらなければならない。

彼女はアイルランド文芸復興の作家としてアイルランドの神話に興味を持ち続けたが、それは常に「扇動プロパガンダ」的な作品として表現されたわけではない。例えば、パトリック・ピアース (Patrick Pearse) らナショナリストたちはクーファーリン (Cuchulain) をヒロイズムのアイコンとし、英雄的な死を美化することが多かったが、ミリガンによるクーファーリンの描き方は常に扇動的であったわけではない。(もちろんピアースのクーファーリン観も複雑であり、詳しい検討を必要とするものなのだが。) また、シェリア・ターナー・ジョンストン (Shelia Turner Johnston) によれ

ば、彼女が「政治的作家だとステレオタイプでレッテル貼りされるのは残念なこと¹⁰」であり、彼女は「愛国心だけでなく愛や友情を重んじた作家であり、ユーモアと感受性の作家¹¹」であるという。

本論文は、そのようにプロパガンダ作家と見られるミリガンの作品、特に死を扱った3編の詩を再読し、そこに個人的な声を見出す試みである。まずミリガンの二つのクーファーリン詩を比較し、そこで描かれる死の表象とその変遷を論じる。一つは彼女がアベイ座で活動していた時代、1908年に発表された詩集*Hero Lays*に収められている詩“The Harper of the Only God”であり、もう一つが南北分断と内戦の時代1922年に発表された“Till Ferdia Came”である。そして最後に、時系列が逆とはなるが、イエイツが政治的かつ模倣的だと批判したアンソロジーに収録されていた詩である“The White Wave Following”を論じる。

“The Harper of the Only God”

1904年、AEことジョージ・ラッセル (A. E. or George Russell) は若手のアイルランド文芸復興の詩人を集め、*New Songs*として出版した。この詞華集にはイエイツの友人でもあるイヴァ・ゴア＝ブース (Eva Gore-Booth) なども参加していたが、その序文でAEはミリガンのみ名前を挙げて取り上げた。「ミス・ミリガンは実に素晴らしい詩を書いた。私の意見ではそれは、現代のアイルランドにおいて最高の愛国的 (patriotic) な詩である¹²」とAEは書き、ミリガンの作品が「愛国的」であることを高く評価した。と同時に、ミリガンの作品の欠点も指摘した。その欠点とは「あちこちに他のアイルランド詩人の影響や模倣が見られる¹³」ということだという。AEは「この詞華集には彼女のその愛国的な詩は収めずに、別の詩集のために取り置いた¹⁴」としながら、イエイツに好意的な書評を期待したという。

それに対してイエイツは“To a Poet, Who Would Have Me Praise Certain Bad Poets, Imitators of His and Mine”という詩を書き、AEおよび*New Songs*の詩人たちを批判した。

You say, as I have often given tongue
In praise of what another's said or sung,
'Twere politic to do the like by these;
But where's the wild dog that has praised his fleas?¹⁵

この詩の題名にある“Certain Bad Poets, Imitators of His and Mine”とは、この詞華集に収められた詩人たちであるが、その中にはミリガンのことも入るだろう。

このようにイエイツが*New Songs*の詩人たちを批判したことによって、後世の批

評家たちは無批判に彼らをイエイツの“Imitators”に過ぎない無価値な作家と見做す向きがあったようである。しかし、1916年に出版された古典的著作、アーネスト・ボイド（Ernest Boyd）の *Ireland's Literary Renaissance* では *New Songs* を若手世代の重要なアンソロジーとみなしている¹⁶。このことは、アイルランド文芸復興運動の渦中においては、ミリガンも高く評価されていたことを示している。

また、デイヴィッド・ガーデナー（David Gardiner）の“The Other Irish Renaissance: The Maunsel Poets”では、イエイツとAEの間に、出版社マウンセル・プレスを中心とした文芸サークルの主導権争いがあったこと¹⁷、イエイツが批判した *New Songs* の詩人たちすべてがイエイツの影響下にあったわけではないこと¹⁸が論じられている。またイエイツとAEの間の対立といえば、アベイ座の運営をめぐる対立が同時期に起きていたこと¹⁹、また1907年にはシング（John Millington Synge）の *The Playboy of the Western World* の上演の可否を巡る論争で対立をしたこと²⁰も想起しておくべきだろう。*New Songs* の出版は1904年であるが、イエイツの批判詩が書かれたのは1909年であり、約5年のずれがある。このことを思えば、イエイツの批判詩は彼とAEとの対立が主な執筆原因であり、*New Songs* の詩人たちの質の問題は二次的な原因であったと言うべきだろう。

そのような詞華集 *New Songs* で注目されたミリガンが1908年に出版した個人詩集 *Hero Lays* に収録されている詩が、“The Harper of the Only God”である。イエイツの批判詩は過度な批判だとしても、確かに彼女の作風は「ケルトの薄明」的なスタイルを模倣している節がみられる。まずはこの詩の出だしの3連を引用しよう。

THE HARPER OF THE ONLY GOD

At the hour of midnight, a time of full moon,
Cuchulain lay, but slept not, on a couch of the dun;
Winds were not breathing, waters were still;
There came a sound of harping across the hill.

The first notes of that harping, they were soft and low
As the voice of his dear love of long ago;
The next notes rang clearly as a triumph call
On a red field of conflict when champions fall.

At the first notes of the music his eyes grew dim;
At the next, the rage of battle arose in him;

He leaps to the window, and lo, the minstrel stands
With a harp of silver in slender hands. (1-12)²¹

弱強五歩格で対韻句の脚韻を踏むヒロイック・カプレットの構成でこの詩は描かれている。確かに一読して、いわゆる「ケルトの薄明」的なスタイルの影響が抜け切れていないのは感じられるだろう。形容詞として“dim”や“soft”などの語が多用されている点も「ケルトの薄明」的ではある。また、ハープの二種類の音色を穏やかな恋人の声と戦場での雄叫びに例えるように、二つの対極的なものに例えて表現する手法も「ケルトの薄明」時代の初期イエイツを思わせる。

しかし、この作品は単純なものではない。この詩は、クーファーリンの死を描いた詩だが、そこにはキリスト教と異教たるドルイド教の邂逅がある。キリスト教とドルイド教の邂逅という点では、イエイツも描いた聖パトリック (St. Patrick) とオシーン (Oisín) の対話のモチーフが用いられることが多い。しかし、ミリガンはこの詩でオシーンではなくクーファーリンをキリスト教の神のもとに立たせた。そしてこの詩では二つの宗教が対等に向かい合うのではなく、タイトルに“the Only God”とあるように、あくまでキリスト教の神を優位かつ唯一神とする包括主義の視点で描いている。これは見方を変えればキリスト教中心主義的な傲慢さにもつながるが、興味深い世界観である。

伝統的に、クーファーリンの死は鴉の姿をした戦の女神モリガン (Morrigan) とともに描かれる。しかしこの詩のクーファーリンのもとに現れたのは、モリガンではなかった。

“Thou must come to my King, who all kings controls,
The land of life and the place of souls.
The shield round earth and the ocean broad,
For I am the Herald of the only God :

“Death men call me; when I draw near
The lips of the mighty are blanched with fear:
So I chant no song, but with signal dumb.
To my Lord’s presence I bid thee come.

But thou, Cuchulain, hast since a boy
Sought for my presence with fearless joy,
Followed my path o’er the blood-soaked ground

Where the sharp bolts of battle on shields resound.

Therefore, O youth of the matchless steeds,
Whom bards belaud for undaunted deeds.
Thy highest praise from a chanter's breath
Is spoken now by the voice of Death." (37-52)

吟遊詩人は唯一なる神の使者であり、そしてその使者の名はDeathだという。「主は与え、主は奪う」(ヨブ記1章21節, 新共同訳聖書)とあるように、唯一なる神は命を与えるだけでなく、命を奪う存在でもある。しかし、どこへクーファーリンの魂を連れていくのだろうか。地獄か天国か。イエイツの作品*The Wanderings of Oisín*では、聖パトリックがオシーンの昔の仲間は地獄に在ると言い、オシーンは洗礼を拒否して、たとえ行先が地獄であったとしても仲間のもとへ赴くことを望む (I will go to Caoilte, and Conan, and Bran, Sceolan, Lomair, / And dwell in the house of the Fenians, be they in flames or at feast. (Book III, 223-24))。しかし、ミリガンのこの作品では、クーファーリンは死を追い求めたがゆえに、神を追い求めたとして洗礼なしで義とされ救われるというのだ。また、“fearless joy”を以って死と向き合うその姿は、イエイツの詩“An Irish Airman Foresees His Death”における“An lonely impulse of delight” (11)を持つ飛行士の姿とも重なる。そのような姿は、少年時代のイエイツの唇に“Only the wasteful virtues earn the sun” (“Pardon, Old Fathers” 18)と言わせたもの、年老いた彼のペンに“tragic joy” (“Gyres” 8)と書かせたものにも通じると言えないだろうか。

ミリガンの詩は、次のように続く。

Cuchulain answered, “I know thee now,
My comrade sworn, by my knighthood's vow;
Then say to our Lord, the whole world's King,
What gift of tribute in going shall I bring ?

“There hang in my house on Dundalga's height
A hundred war-shields brazen bright,
Swords and mantles and steeds in stall.
Save the Liath Macha, I would render all”

Then smiled the harper, “O son of Suaitim,

Thy great deeds for Erin were service to Him;
 And in drops of thy heart's blood on Uladh's sod
 Thou shalt count thy tribute to the only God. (53-64)

クーファーリンは、自らを天へ召そうとしている神を受け入れ、our Lordと呼ぶ。(この回心/改宗が急すぎるという見方ももちろんできる。)そして贈り物をしたいという。しかしDeathは、エリンの地のために為したこと、その流血が神への奉仕になったのだという。アイルランドのための流血が神への奉仕にもなるというこの考えは、パトリック・ピアースの思想とも重なる部分がある。ピアースは「流血は清めであり聖化するもの²²」と考え、「独立運動のすべてが、アイルランドすべてが、アイルランドのための流血によって再洗礼を受けた²³」と考えた。ピアースの作品のように、ミリガンのこの詩もアイルランドのための流血の自己犠牲を呼びかけるものと解釈することは、あるいは類似の思想に基づくものだと解釈することは十分に可能である。またそもそも、流血の奉仕によるアイルランドの再生と聖化というテーマは18世紀以降バラッドに歌われてきたテーマでもあり、イエイツも演劇*Kathleen Ni Houlihan*などで扱ったものでもある。

この詩は、次のような最終連を以って終わる。

Next day at sunset, erect, alone,
 Cuchulain died by a standing stone —
 Died, but fell not, with sword in hand,
 And his face to the foes of the Northern land. (65-68)

死しても倒れることはなかったクーファーリンの姿が描かれる。その戦いで彼が守るために戦うものはthe Northern land、つまりアルスター、現在の北アイルランドである。このクーファーリンの姿は“No Surrender!”を合言葉とするアルスター・プロテスタントのユニオニストにも通じる。“No Surrender!”というユニオニストの声は、デリー／ロンドンデリーの包囲戦の中で、落城寸前の危機の中で生まれた²⁴。長い籠城戦の中で、城壁内の町は疫病が流行り、多くの者が死んだという。それでも降伏して城門を開けないという道を選んだというアルスター・プロテスタントの記憶、および神話である。そしてこの詩が書かれた後、1916年のソンムの戦いの中でこの記憶は再生産され、アルスターのプロテスタントは英国のために戦った血で故郷を英国として守り通したという神話になった²⁵。

この詩においてクーファーリンの行為が“Thy great deeds for Erin were service to Him”と褒められたように、“Erin”(アイルランド全島)のために献身することは善

いことであるとミリガンは考えていた。しかしその次の行で “drops of thy heart’s blood on Uladh’s sod” と続くように、アルスターの土に流された血に背くことはできないという思いを彼女は抱いていた。ここに、アイルランド全島とアルスターの両方に帰属意識を持つ彼女の心理が反映されている。

アイルランド北部に生まれたミリガンは、アイルランドに二つの政府ができる前、すでにアイルランドとアルスターの二重のアイデンティティを抱えていた。また、ドルイド教のような、いわゆる「ケルト」の思想にも強い興味を抱きながら、彼女はキリスト教の神のない世界を描くことはしなかった。そうして彼女は、唯一の神の使者である死を追い求めることによって、異教徒も神の御顔を追い求めたとして義とされるという大胆な神学をも提示したのだ。このように、このテキストが示す重層性は、アイルランド文芸復興期にアルスターに生きたプロテスタント作家であるミリガンの思想の多重性を示している。

“Till Ferdia Came”

アイルランド近代史は1916年、復活祭蜂起によって大きな転換点を迎える。しかし、この時期以降、アリス・ミリガンは孤立を深めていくことになる。彼女は独身／非婚の女性として、家族の“full-time carer”としての役割を一身に背負わされていた²⁶。1916年に彼女は両親と姉を介護の末に相次いで看取り²⁷、1917年には英国軍から除隊してアルコール依存になり、通常の仕事ができなくなっていた弟の面倒を見ることになった²⁸。そしてアイルランド独立戦争中の1921年には、その弟が元英国軍将校ということでIRAから狙われ、彼を匿うためにダブリンを去ることになった²⁹。

アイルランド独立戦争の講和条約により、アイルランド北部と南部に別の自治議会が作られることになった。この結果、南26州は完全な独立国ではなく、英国王の権威のものと自治州 (Dominion) として1922年に独立し、アイルランド自由国となる。しかし、この条約に反発する共和派と自由国派が対立し、アイルランド内戦が勃発した。彼女の詩“Till Ferdia Came”では、この内戦時に書かれた詩である。

この詩の語り手は、クーファーリンの神話を本で読んでいた詩人である。詩人は胸を躍らせながらクーファーリンの話を読んでいたが、途中でクーファーリンが彼の親友のフェルディア (Ferdia) と戦わなければならない場面にとどり着く。そこで詩人は内戦で死んだマイケル・コリンズ (Michael Collins)、カハル・ブルハ (Cathal Brugha) などの革命家たちを思い出し、その意識の中で双方が混じり合う。英雄たちの名を詩に刻むことは、イエイツも為した詩人の仕事である。イエイツは“Easter, 1916”を1916年に私家版で出版していたが、詩集 *The Wild Swans at Coole* (1917; 1919) には収録せず、独立戦争が激しくなった1920年に英国 *New Statesman* と米国 *The Dial* で出版、1921年に出版した *Michael Robartes and the Dancer* に収録した。ミリガン

もおそらく、イエイツの“Easter, 1916”を近い時期に読んでいたことが推測される。

ミリガンは詩“Till Ferdia Came”において、“The Harper of the Only God”で表した死と喜びについての考えを否定する。

Till Ferdia Came

We read it in that ancient tale,
The glory of the Northern Gael;
How young Cuchulain's single sword
Stemmed the advance of Connacht horde,
And one by one the champions fell
On Ulla's border guarded well;
Battle he deemed a joyous game
Till to the ford Ferdia came³⁰ (1-8)

この詩はこのように始まる。やはり詩形はヒロイック・カプレットである。“tale”と“Gael”など、ある意味陳腐な脚韻が用いられており、また彼女はここでも“Northern”にこだわっている。“Battle he deemed a joyous game / Till to the ford Ferdia came”という言葉は叙事詩『クーリーの牛争い』において、クーフリーンが歌う唄のリフレイン³¹である。しかし、このリフレインは神話の一節の単純な反復ではなく、後の連では“Death was a jest, the fight a game / Till to the ford Ferdia came” (56)となる。この詩において、もはや死は甘美な使者でもなければ戯れ事でもない。ここでの“a jest”という表現は、“Easter, 1916”での第1連で描かれた、まるで“motley”を着ていたような日常 (13-14)とも重なる。かつて空想していた死もまた、そのような戯れ事だったという。

You shed your blood on Dublin street
Where oft, toward festive hall your feet
Had walked in happy company
With lads, who lived this sight to see. (63-66)

ダブリンでの“festive hall”での“company”との日々というモチーフも、“Easter, 1916”における“club”での“companion”との日々 (11-12) というモチーフからの影響が感じられる。また“Easter, 1916”では“Now and in time to be” (76)として今もこれからも緑を着るのだという希望を描かれているが、ミリガンは“As it was

then it may be so” (110) と、神話にも見られ、今後も見られるであろう流血と涙を思う。

As it was then it may be so
 In these sad days of blood and tears.
 Have faith – trust God for happy years,
 For strength upheld, for peace restored
 ‘Twiixt those who battle at the ford. (110-114)

詩人は流血と涙の日々にあっても信仰を以って平安を祈り求める。しかし、解決策はこれしかないのだろうか。“Have faith – trust God” といっても、その対立の背景に信仰の違いもある場合はどうすればいいのだろうか。この最終部についてジョンストンは「痛ましい楽観主義」と評した³²が、少なくとも流血と涙が存在していることを否定せず、それを前提として現実を受け入れようとしている強さは感じられる。また、“the ford” という場所が強調されている。それは分断の象徴であると同時に歩み寄ることもできる場である。

“The White Wave Following”

イエイツは、AEとの反目もあって詞華集 *New Songs* を批判したが、その詞華集に収録されているミリガンの詩は、模倣的なものと受け取られがちな、いわゆる「ケルト」的なものだけではない。最後に論じるのは、この詞華集に収められている、彼女の個人的な経験に基づく詩 “The White Wave Following” である。

ミリガンはロンドン大学で学んだ後、北アイルランドの女学校 (Miss McKillip’s Ladies’ Collegiate School) でラテン語を教える教師となった。そこで出会ったのが、同僚の音楽教師でルームメイトのマジョリー・アーサー (Marjorie Arthur) である。ミリガンはスコットランドのハイランド地方出身の彼女と意気投合し、親密な関係を築いた。しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。マジョリーは1892年に病气 (おそらく腹膜炎³³) のため急死してしまう。悲嘆にくれたミリガンは、自らのベッドルームの壁にマジョリーの写真を花とともに飾った祭壇を作った。ジョンストンは、ミリガン自身が描いたその祭壇のスケッチを本に掲載し、それを “shrine” と形容している³⁴。

ミリガンは亡くなったマジョリーへの想いを様々な詩に綴った。夢にマジョリーが現れたことを歌った詩 “Nocturne” や、マジョリーと言葉を交わすために降霊術に頼ろうかと迷う詩 “A Message” などにおいて、彼女は痛切な想いを吐露している。そのマジョリー詩篇群ともいべき詩群の中で、穏やかな抒情を湛えた詩が、1901

年に書かれた詩 “The White Wave Following” である。

THE WHITE WAVE FOLLOWING

Written on a voyage through the Hebrides

In memory of M. A.

Like the white wave following
Our ship through changing waters,
The memory of your love is
In life that alters:
The clouds pass overhead,
And like clouds the islands
Flock up – and hurrying on
Float by on the blue of ocean;
The sun goes, and the moon,
Along many mountains
Amid changing stars,
Into heaven uprolling,
New lochs and lands
In each hour illumines :
And all waves of the sea,
Tide-swept and wind-swayed
From morning unto night,
Move ceaselessly by us.

But against all winds
And all swift tide-races,
To all lochs and lands
And sea-girt lonely places,
Sunlit and moonlit,
Heaving and hollowing
Through wind-gleam and glass-calm,
Comes one white wave following.

And like that white wave,

In the sunlit Sound of Jura,
 Like that wave, bright-crested
 Amid grey seas by Sanda,
 On black rocks breaking
 Around distant Rona,
 Or in foam track fading
 O'er a sea of slumber.
 As we came from Canna
 To Skye of your kindred:

Like that white wave, following
 The ship through changing waters,
 The memory of your love is
 In life that alters.³⁵

前書きにある“M. A.”とは、もちろんマジョリー・アーサーのことである。“Skye of your kindred”とあるが、マジョリーの母方はヘブリディーズ諸島のスカイ島出身であった³⁶。

この詩は、これまで見てきたミリガンの詩とは違い、神話に題材を取ったものでもなければ、政治的な事件を扱ったものでもない。いわゆる「ケルト」を連想させるものも、登場する地名がすべてヘブリディーズ諸島のものである（“Jura” “Sanda” “Rona” “Canna”そして“Skye”はすべて島の名）というだけである。この詩ではヘブリディーズの自然の移ろいのサイクルが描かれ、その中を進む船と、その航跡の波に焦点が当てられている。水面と雲を対比し、その変化を描くことにより生と死を描くのはイエイツの“Easter, 1916”の第3連を思わせるが、こちらは約15年前に書かれたものである。ただし、イエイツの“Easter, 1916”では鳥や馬などが描きこまれるのに対して、こちらは生物の姿はなく、あくまで静かである。

これまでに見てきた彼女の詩と違い、この詩は一部を除いて規則的な脚韻を踏んでいない。“waters”と“alters”, “tide-races”と“places”, そして母音で終わる島の名前などは意識的に韻を踏もうとしているのを感じるが、それ以外は不自然になるくらいなら脚韻を踏むことを放棄しているかのようである。

最初の連では“Our ship”とあるが、最後の連では“The ship”となっている。素直に読めば、この詩の前半部分ではマジョリーとミリガンの二人での船旅の記憶が描かれ、最終連では、この世に残されたミリガンだけが船に乗っている、と解釈できる。ジョンストン版の伝記には、この詩を書いた1901年の船旅については書かれて

いる³⁷（モリス版には記述がない）が、二人での船旅のことは、どの伝記にも書かれていない。この二人での船旅が伝記的事実であれ、創作としての虚構であれ、舞台設定として美しい。個人的には、少なくとも一度は二人で船に乗ってヘブリディーズ諸島を訪れたことがあると解釈したい。その理由として、最終連の“Like that white wave”の“that”である。この“that”には実感がこもっている。またこの“that white wave”と“following”の間に置かれたコンマは、“The memory of your love”を自らが乗る船の後に置く働きをしている。止まることのない時間（changing waters）を進む自分（The ship）はマジョリーとの思い出（The memory of your love）よりも先に進むのである。しかし、消えながらも消えることはないまま、すべては流転する生（life that alters）の中にあるという。最後に繰り返される“waters”と“alters”の脚韻は、水の流れと生の流転を重ね合わせるのにも効果的に働いている。

この詩を含む詞華集を、（AEとの対立もあり）、イエイツはまとめて政治的かつ模倣的だと批判したが、彼はもう少し慎重に読み解くべきだっただろう。

おわりに

本論文は、プロパガンダ作家と見られがちなアリス・ミリガンの作品、特に死を扱った3編の詩を再読し、そこに個人的な声を見出す試みであった。“The Harper of the Only God”においてミリガンは、喜びをもって死を追い求めたがゆえにキリスト教徒ではないクーファーリンも救われるとするという独創的な考えにより、アイルランド神話とキリスト教とを接合しようとしている。これは同時にアイルランドのため、およびアルスターのための流血が救済となるという考えに通じるものでもある。また殉死の対象がエリン（アイルランド全土）とアルスター（北アイルランド）と二重になっている構図は、ミリガン自身のアイデンティティの二重性を反映している。

アイルランド内戦時に書かれた“Till Ferdia Came”では、死はもはや喜びとして捉えられていない。ミリガンはクーファーリンが親友フェルディアと戦う『クーリーの牛争い』の挿話と内戦を重ね合わせ、神話にも見られ、今も後も変わらず続くであろう流血と涙を思う。分断の象徴であると同時に歩み寄ることもできる場である“the ford”を思いながら、信仰を以って平安を祈り求める詩人の姿が示されている。

最後に扱った“The White Wave Following”は、大切な人を失ったミリガンが綴った詩である。この詩では航跡の波に思い出を重ね合わせ、流転する生の時間の中、先に進む船の姿を描くことで、別離を受け止めながらも前に進む詩人の決意を抒情的に表現している。

北アイルランドのプロテスタント女性でありながらアイルランド文芸復興および独立運動に参加したアリス・ミリガンは、従来周縁的な存在として扱われてきた。また

一方ではその属性ゆえの視点を与える存在として再評価する動きもあるものの、彼女を政治的な作家あるいはプロパガンダ作家とみなす風潮がある。しかし、本稿で見てきたように、彼女は単に流血を伴う闘争を呼びかけるだけのプロパガンダ作家に過ぎないのではなく、様々な形で自らの想いを詩に織り込んだ抒情詩人でもあったのである。

本論文は研究ノート「アリス・ミリガンのクーファーリン詩における死の表象の変遷」『イエイツ研究』(46号, 2015. pp. 32-35) に大幅に加筆修正を行ったものである。またJSPS科研費 20K00393の助成を受けたものである。

《注》

- 1 1891年の統計では、カトリック38.3%、長老派31.8%、アイルランド聖公会25.3%、メソジスト3% (松岡清『北アイルランドのプロテスタント：歴史・紛争・アイデンティティ』(彩流社, 2008. p. 255) であり、同じ「北アイルランドのプロテスタント」でも圧倒的に少数派である。
- 2 R. F. Foster, *Vivid Faces: The Revolutionary Generation in Ireland, 1890-1923* (New York: Norton, 2014) p. 47.
- 3 Shelia Turner Johnston, *Alice: A Life of Alice Milligan*. (Omagh: Colourpoint Press, 1994) p. 70.
- 4 Foster, p. 152.
- 5 Catherine Morris, *Alice Milligan and the Irish Cultural Revival* (Dublin: Four Courts, 2012) p. 17.
- 6 Morris, 裏表紙の宣伝文.
- 7 Foster, p. 152.
- 8 Ian d'Alton, "Review: Inventing Alice Milligan" *The Irish Review*. No. 51, (Winter 2015), p. 107."
- 9 ミリガンの詩の主な発表媒体はアイルランドのナショナリスト・共和主義者の機関紙であり、彼女の詩集*Hero Lays* (1908) はアルゼンチンに移民したアイリッシュ・ナショナリストの支援で出版された。
- 10 Sheila Johnston, ed., *The Harper of the Only God: A Selection of Poems by Alice Milligan* (Omagh: Colourpoint, 1993) p. 3.
- 11 *Ibid.*
- 12 A. E. ed., *New Songs: A Lyric Selection Made by A.E. from Poems by Padraic Colum, Eva Gore-Booth, Thomas Keohler, Alice Milligan, Susan Mitchell, Seumas O'Sullivan, George Roberts, and Ella Young* (Dublin: O'Donoghue & Co., 1904), p. 5.
- 13 *Ibid.*
- 14 *Ibid.*

- 15 この論文におけるイエイツの詩の引用は W. B. Yeats. Richard Finneran, ed. *The Collected Works of W.B. Yeats, Vol. 1: The Poems* (New York: Scribner, 1997) のテキストに拠る。括弧内は行数である。
- 16 Ernest Boyd, *Ireland's Literary Renaissance* (Dublin: Maunsel, 1908), p. 254.
- 17 David Gardiner, "The Other Irish Renaissance: The Maunsel Poets" *New Hibernia Review / Iris Éireannach Nua Vol. 8, No. 1* (Spring, 2004), p. 58.
- 18 *Ibid.*, p. 59.
- 19 Terrence Brown, *The Life of W. B. Yeats* (Dublin: Gill and Macmillan, 2001), p. 160-2.
- 20 *Ibid.*, p. 169.
- 21 この詩の引用は Alice Milligan, *Hero Lays* (Dublin: Maunsel, 1908) のテキストに拠る。括弧内は行数である。
- 22 Patrick Pearse, "The Coming Revolution" (1913) qtd.in Ruth Dudley Edwards, *Patrick Pearse: The Triumph of Failure* (London: Vicor Gollancz, 1977), p. 179.
- 23 *Ibid.*, p. 217.
- 24 John O'Beirne Ranelagh, *A Short History of Ireland* (Cambridge: Cambridge UP, 2012), p. 76.
- 25 Fran Brearton, *The Great War in Irish Poetry: W. B. Yeats to Michael Longley*. (Oxford: Oxford University Press, 2003) p. 32.
- 26 Morris, p. 48.
- 27 *Ibid.*, p. 49.
- 28 *Ibid.*, p. 50.
- 29 *Ibid.*
- 30 この詩の引用は Sheila Johnston, ed., *The Harper of the Only God: A Selection of Poems by Alice Milligan* (Omagh: Colourpoint, 1993) のテキストに拠る。括弧内は行数である。
- 31 Lady Gregory, *Cuchulain of Muirthemne* (John Murray 1902; Colin Smythe, Coole Edition, 1973) p. 188.; Thomas Kinsella, *The Táin : From the Irish Epic Táin Bó Cuailgne* (Oxford UP, 1970; 2002) p. 204.
- 32 Johnston, *Alice*, p. 135.
- 33 *Ibid.*, p. 62.
- 34 *Ibid.*, p. 63.
- 35 この詩の引用は A. E. ed., *New Songs* のテキストに拠る。
- 36 Johnston, *Alice*, p. 36.
- 37 *Ibid.*, p. 111.